

# 越

えっけい

# 溪

## —江戸時代水墨画の世界—

## 袋井市歴史文化館 平成24年度企画展

越溪は、可睡齋三十八世因孝休覚和尚の号である。宝暦8(1758)年に駿河国府中町の山本屋忠右衛門の息子として生まれ、寛政12(1800)年から天保7(1836)年までの36年間を可睡齋の住職として勤めた。

その間多くの作品を生みだし、「達磨図」「出山釈迦図」「大黒図」などを得意とした。大胆な墨描と濃墨の細筆で巧みなアクセントを置くことが特色で、禅僧らしい気迫のこもった作品が多い。

天保7(1836)年、78歳にて没した。

**35** 大黒・恵比寿・布袋の三福人画で「越溪問産式」「因孝休覚号印」「越溪」の落款も鮮明である。画面上の書は、禅僧らしい筆運びで画面全体を引き締めている。



**24** 山水画で「越溪問産不式」「因孝休覚号印」「越溪」の落款も鮮明である。画面右上の「可睡休覚書画半天中 峯独立 勢不同一 山与群山」の書は禅僧らしい筆運びで画面全体を引き締めている。



**4** 大黒図で、文政13(1830)年の銘のある晩年72歳の作品である。



**66** 鍾馗図で、「越溪」の落款も鮮明である。鍾馗とは、中国の疫病をふせぐ鬼神。唐の玄宗皇帝の病床の夢に鍾馗と名乗って現れ、病魔を祓ったので、画工の呉道士にその像を描かせたことに始まる。日本では、五月人形として作られている。



**46** 大黒図で、「越溪」の落款も鮮明である。大黒は、七福神の一。米俵の上に乗し、頭巾をかぶり、打ち出の小槌を持ち、大きな袋を肩に担ぐ像で表わされる。中世以降、大国主命と同一視されて広く信仰され、恵比寿とともに福德の神とされる。



**67** 達磨図は、多くの作品の中でも得意とした画題であり、大胆な墨描と濃墨による巧みな筆使いが特徴で、迫力のある作品である。達磨は、菩提達磨(円覚大師・達磨大師とも)が、魏の嵩山にある少林寺で、壁面に向かって九年座禅を行い、手足が腐ったという伝説による。



**103** 七福神の内の大黒図で「書画臨」「越溪」などの落款も鮮明である。作品上部には、「現可睡七十六翁越溪画」と記され、天保5(1834)年の銘がある。76歳の作品である。

